

ホトトギス

昭和十四年三月十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成二十二年十一月一日発行（第四百十三卷第十一号）

ホトトギス

十一月号



俳句随想 〔三百四十一〕

汀子

匿名の嘆願書を頂いた。都道府県単位の当番制でホトトギス大会と称する地区大会が行われているが、若年層不在の地区の老人達は大変困惑している。地方の大会開催は高齢者には負担が重過ぎる。開催を中止しない場合は強要罪として告訴する話も密かに囁かれているといったいささか物騒な文言を含む嘆願書であった。

現在ホトトギス大会は「北海道」「東北」「北信越」「関東」「東海」「関西」「中国」「四国」「九州」の九ブロックに「石見」「北近畿」を加えた十一大会を年一回催している。どの大会も花鳥諷詠を志す仲間達の年一回の腕試しと交歓の場として多くの方に喜んでもらっていると感じている。しかし開催地でお世話下さる方の御苦労は大変なものがあるだろう。御高齢の方達ばかりになってしまった地方では尚更である。

その為には隣県の人達の応援を頼むとか、若者に入ってもらおうとかの工夫も大切である。このようにしてうまく行っている地方も多いのであるが、先ずは実情を知ることが大切と思う。どうか大会に関しての実情を匿名でなくお知らせ頂きたい。

旬日記 汀子

平成二十一年一月一日 関西野分会

切干を戻す手順は簡単に
朝の間の初霜ほどけはほめ居
切干を炊く結界のなき家
十一月一日 下萌旬会

梅田に実る勢ひのあること
秋惜む心に深く人悼む
快晴のつゞかぬ秋を惜みけり
時雨るも晴るるも旅路華やける
十一月四日 ロイヤル俳壇

初霜の旅路はるけくありしか
伊開の折目正しき富らしぶり
道迷ひても初雪の富士を見て
よべ熟寝せし初霜の朝かな
午後も又とどまりて会小六月
十一月五日 悼 瑞告冬縁

露けしや思ひ出どれを繙くも
忌日来ることを知らせて石路の花
初雪の一瞬の富士見のがさず
石路の花咲くまで忘れをりしこと
色失せるまで存在の石路の花
旅多き日々神も又旅立たれ
十一月七日 関西ホトギス同人会

静謐の山に冬立ちにけり
虚子の句碑青畝の句碑も冬に入る
今こや悲しき訃報消えまじく
立冬や悲しき訃報消えまじく
十一月八日 関西ホトギス俳句大会

甘樫の濃紅葉あり薄紅葉
一木の濃紅葉あり薄紅葉
露霜の光るはほどけゆく力

十一月十日 大阪倶楽部

咲き残りぬし石路の花旅帰り
こんなにも冬暖かき旅二日
この辺のものはまほろば冬ぬくし
甘樫の丘はまほろば冬ぬくし
旅共にせしを存問冬ぬくし
甘樫の丘の日月落葉積む
十一月十日 綿葉倶楽部

甘樫の丘へ山茶花見つつ行く
これよりの日々を告ぐるや初時雨
旅多き日も花ば過ぎ冬に入る
山茶花の花に佇み登る坂
止みぬしと思ふもしばし初時雨
十一月九日 投句「俳句王国」

風の通り抜けたる朝の作務
流星を見て眺舌の人となる
極めたる色はどの色冬紅葉
十一月十二日 清交社

茶の花に抜け道ありて通りけり
一翼を担ふ文化の日なりけり
六甲の尾根より現れて鷹の空
歳時記の改定進む文化の日
十一月十四日 中国ホトギス同人会

牡蠣を割る匂ひに馴れてゆきにけり
朝の牡蠣の出荷は築地かも知れぬ
十一月十五日 中国ホトギス俳句大会

平和てふ言葉にも露寒きこと
日本での悲しき過去を偲ぶ冬
忘れぬし寒さも旅の一部分
十一月十六日 アサヒカルチャー

訪ふたびに悲しみ深き街の冬
狼籍といふは狭庭の落葉かな
被爆地の紅葉燃えてぬし旅路
十一月十七日 有恒倶楽部

過去背負ふ被爆の街の木の葉かな
昨日とは違ふ枯葉の敷く狭庭
十一月十七日 無俗会
初霜に一歩踏み出す旅の朝
スケジュール割り込んで来し初時雨
初霜となり旅立約す晴
新説を語り邪馬台国の冬
現実と夢の間 初時雨
この傘をさして行きたし初時雨
十一月十八日 夏潮旬会
機嫌よきことも器量や七五三
亡き人を悼みて寒き思ひまた
その人の訃を知らせたるよりの冬
クリスマスリースが時を刻み初む
北風に 摩雲 退りゆく夜空
十一月十九日 摩耶山俳句大会
冬紅葉 絵巻山路の九十九折
ともかくも山の寒さをあなぞら
この燃ゆるいろ語らば冬紅葉
十一月二十四日 悼赤井よしを縁
この冬の淋しき日々を偲ぶのみ
十一月十七日 時雨会
木戸開けて隣へ行き来石路の花
犬死して庭の風除残さるる
神の留守にも講の作務夕の作務
十一月二十八日 句会と講演の会
色尽し散るものは散り神渡
明るさを地に移しつつ神渡
切干を煮たる匂ひに馴染まぬ子
冬紅葉明りの庭を掃き寄する
十一月二十九日 野分会
初霜の消ゆる早さに旅立ちぬ
十一月三十日 「俳句」へ寄稿
掃き清めありし大地や初明り
刻々と進みゆくのみ去年今年
犬小屋を踏みてゆく力年迎ふ
初富士の稜線に景改る

廣太郎句帳

廣太郎

石舞台落葉一片許さざる

十一月十二日 土筆会

さやうならさやうなら冬立ちにけり
風騒ぐとき枯葉舞ふ枯葉落つ
枯葉落つ神田川てふ褥かな

十一月十三日 「円虹」一月号出句

銀に北国染めて初明り
初明り江戸の風水明かしつつ
六甲の句碑は如何にと初明り
土佐の海歴史重たく初明り
初明り武蔵生れし軍港に

十一月十三日 「あらうみ」諸家近詠

初富士や旅の車窓の二十分
初富士や虚子山荘の木々高し
初富士や目黒は坂の多き街
初富士やホテルマウント富士の黙
初富士やここであなたと暮せし日

十一月十四日 中国ホトギス同人会、大会

牡蠣打に無言てふ技ありにけり
牡蠣打の研修生といふ手付
冬日向漁港の匂ひ攫ひゆく
帆立貝褥に牡蠣の育ちゆく
語めの声くぐもりて神の留守
冬めくや原爆ドームあるがまま

十一月十七日 学芸句会

古池の秘密を明かしゆく時雨
片時雨古新聞を、と濡らし
古今集時雨の余韻聞きながら

十一月十七日 草木瓜会

切干や空青くなる深くなる
切干の風に乾いてゆく音色
小春日やワイングラスに透ける君

万象を包み込みたる小六月

十一月十九日 登真会

切干や赤城嵐といふ味に
人生の回想などもして小春

忌日寺画布となりゆく石路の花
オリオンのベルトの辺り冬めける
忌心は思ひ出となり石路明り
冬めくや丸ビルの窓小さくなり
浅漬に厨目覚めてゆきにけり

十一月十九日 「ひげ増」開店二十五周年祝句

二十五年絶えぬ笑顔や冬ぬくし

十一月二十二日 岡山開句会

冬紅葉ためらひながら燃えにけり
木の実落つ墓所の広さを響かせて
青写真めく池の面でありにけり
寒灯下少女のやうな伴明子
笹鳴を聞き分けてゐる若さかな
佳人踏みゆける落葉の音嬉々と

十一月二十四日 着水句会

若者の街さりげなく黄落す
神宮の鳥語髪置揺らしゆく
その中に笹鳴秘めて杜騒ぐ
神の留守守ける千年杉の黙

十一月二十五日 目黒学園句会

しよとうとは神のコーヒータイムかな
帰り咲く野は四色でありにけり
初冬の雨のち晴といふ天与

十一月二十八日 ホトギス社句会

切干や東京都練馬区の路地
神渡邪馬台国の謎深め
切干の決め手裏六甲の風
神渡名犬ロンを伴ひて

平成二十一年十一月四日 一水会

冬めくや忘れたきこと一事あり
大綿の魂吸ひ込める虚空かな

十一月四日 刈谷市民俳句大会

旅の縁とは楽しさと露けさと
旅重ねつつ秋惜みつつ西へ

十一月五日 蕉心会

信号の黄色に秋を惜みけり
子等走るときやや寒を友として
学生もえうちゑん児も冬支度
チャイムてふ小学校の秋の声
冬近き色に蕉庵整へり
風邪ひいて恋の病は治りけり

十一月七日 関西ホトギス同人会、大会

笹鳴は足下鳥語は梢より
かけがへのなき人逝きて冬来る
冬うらら古代と未来繋ぐ村
献杯に寒灯潤む宴かな
石舞台古墳冷たく入を寄せ

十一月九日 朝日カルチャー若草句会

落葉積む蘇我入鹿の塚小さし
落葉踏む万葉の音奏でつつ

雑詠

廣太郎 選

木の実踏み潰しバックをして駐車 大阪林 直入
 昼も星見ゆるかに澄み秋の空 同
 案外に寝心地悪しき菊枕 同
 忌明けとは数字の上よ合歓淡し 宝塚 水田むつみ
 納骨の間の梅雨晴でありしかな 同
 梅雨月夜しづくに濡るる七七日 同
 花も散り大いなる師も逝きにけり 埼玉 岡安仁義
 西行の花を慕うて逝きたるや 同
 朧なるものばかりなり通夜の灯に 同
 池渡る蛇のくねりの重さ消し 福山 竹下陶子
 やんまてふいのちに生れたる飛翔 同
 山雨絹の如くにとぎす花菖蒲 同
 鶺鴒出づ闇よりも濃き影として 神戸 立村霜衣
 すでに血の通うてをりし鶺鴒かな 同
 勝ち誇る翼の大きさも荒鶺鴒 同
 梅雨激し峰寺人を遠ざけて 同
 ビルの影軽さを遊ぶあめんぼう 同
 青嵐大東京の迷路めく 同

神を抱く茂り仏を抱く茂り 奈良 古賀しぐれ
 千年の茂り茂りに神在す 同
 鹿の子生れ飛火野青き小宇宙 同
 やすらぎてこの後苑の夏椿 たつの 浅井青陽子
 清貧は心の支へ老鶯に 同
 風旨し侍れば百寿夏に入る 同
 初夏の風切り跳躍の弧を描く 神戸 涌羅由美
 まづ風についりの兆しありにけり 同
 子の時間ゆつくり進み蟻の道 同
 暮れかけて晴れてくる空合歓の花 龍ヶ崎 今橋真理子
 五月闇森の匂ひの濃くありぬ 同
 形代のしみじみとある白さかな 同
 梅天や玉屋鍵屋の空を待つ 東京 橋本くに彦
 箱庭の湖に現の雨が降る 同
 売物の西瓜またもや叩かるる 同
 山荘に籐椅子といふ主棲む 神戸 長山あや
 闇重き信濃の雷は地底より 同
 玫瑰や子は国を去り母を去り 同
 沈めたる姿に海月浮いてをり 香川 湯川 雅
 睡蓮の閉づる時間へ咲き急ぐ 同
 平面を引き摺つてゆく青田風 同
 風光る聖土曜日 Brooke トス 東京 大久保白村
 うららかや機械の声はみな佳人 同
 ちぐはぐな向きに草の芽伸びはじむ 同

雑詠句評（十月号より）

暮潮・雅・純也
昭代・仁義・一步
佳乃・くに彦・しげ人
比奈夫・廣太郎

太陽にまみえ筍とはなりぬ 福山 竹下陶子

筍は私の住む徳島県とくに南阿波に多く、又質もよく、その量は熊本県に次いで全国第二位と言われている。筍掘りもしばしば経験したが、よく整備された軟らかい土の玄人でなければ見つけれない程度のわずかに盛り上がったところを鋏でほとんど一撃で掘り上げる。従って食用に供するには、先端部が地上に見えたのでは遅い。そんな光景をいつも見ているので、この句の叙述には少し違和感を感じるが、それは地方によって異なるのも当たり前であろう。もつともこの句にしても、ほんのわずか先端部が地上にでただけであろう。それを「太陽にまみえ」とかんじた俳句的感受はみごとなものだ。作者の感性とのわざによるものと言っていい。（暮潮）

筆者も一度筍掘りをした事があるが、暮潮様のおっしゃっておられるように、本当に美味しい「筍」は、未だ土から地上に出る前に掘り出すのだと教わった。この句、育って地上に顔を出した

後とも取れるが、又出る前に掘り出された瞬間とも取れる。何れにせよ文字通り破竹の勢いを感じる。（廣太郎）

母の日をきのふにしたる訣れかな 宝塚 水田むつみ

訃報の度に哀しみと驚きが交錯する。

母上の桑田永子様を亡くされた哀しみの御句。九一歳で母の日を迎えられたお母様に、お側にいられる仕合せを感謝しながら、つい昨日、母の日を祝われたのではなかるうか。まさか・昨日の今日で、お訣れとならうとは思ひもよらぬ事だったと拝察される。いくら年齢を重ねていようと、親はいつまでも生きていてくれるものだと思っているものだから、こんな日に訣れが来ると言うことは、悲しむことをしばらく忘れるくらい、びっくりなされたことと思う。

「六〇余年間の母への感謝を、昨日の母の日には、伝えきれたであろうか」……という思いが占めて、「毎の日」の季節がずしりと胸に伝える。（雅）

平成二十二年五月十日御母堂桑田永子様を亡くされた作者である。その前日が奇しくも「母の日」であった。悲しみも一入であったであろう事はお察しして余りあるが、淡々と述べられておられるところが一層悲しみを誘う。この季節の重さをあらためて感じさせてくれる句である。（廣太郎）（以下略）

天地有情

江戸選

掛香や遺愛の居間はそのままだに
ふと問うて声なき答とは涼し
葉狩吉野の空を傾けて
葉の日酒控へると言はれても
六月の月ややいびつややうるみ
夕拔終へて人散り星ひとつ
子規虚子も偲ばるる須磨梅雨の月
梅雨の月ちらつと切れし雲間より
大小の浮力大小浮人形
ダウンロードサービス登山地図にまで
血圧がするする下り明易し
涼風に竹が笑つてるといふ娘
先づ目立つ花となりしよ七変化
あぢさゐに駐車が出来て富士ありし
梅雨しとど庭に元気なパセリ摘む
風孕む雲は走りて梅雨晴間
蜘蛛は罫を人はことばを砦とす
月見草咲き切る終のひと揺らぎ

宝塚 水田むつみ
同
東京 稲畑廣太郎
同
同 今井千鶴子
京都 安原 葉
同
神戸 後藤比奈夫
同
豊中 瀧 青佳
同
熱海 嶋田一步
同
同 嶋田摩耶子
神戸 長山あや
同

武家やしき跡の沢なり菖蒲園
馴れきつてこの小城下の老鶯に
手術の目いたはりながら髪洗ふ
冷房のいよよ強まる手術室
父の日や父ゆづりなる好奇心
父の日の父恋ふこころ献盃に
峰入や錫杖を突き錫鳴らし
眠る葉の見る夢は斯く合歡の花
澱みなく洗ひ流せし夕立晴
滴りの深山の靈氣賜はりぬ
二上の雨雲に來よ時鳥
草高く茂れる中の朱雀門
大空に足を掛けたる蜘蛛のあり
手のごとく動くことあり蜘蛛の足
草木染梅雨の晴間の彩となる
薔薇生けてくれて父の日なりしかな
結界の蟻おのづから列たゞす
蟻ひとつ枯山水の海わたる

たつの 浅井青陽子
同
東京 山田閨子
同
同 田治 紫
同
榎原 稲岡 長
同
吹田 宮崎 正
同
箕面 井上浩一郎
同
明石 中杉隆世
同
東京 松本つよし
同
福岡 岡松永唯道
同

天地有情句評

汀子

子弟の苦悩に思いを馳せる。

大小の浮力大小浮人形 神戸 後藤比奈夫

物理の発見。

ふと問うて声なき答とは涼し 宝塚 水田むつみ

血圧がするする下り明易し 豊中 瀧 宵佳

孤独の中で立ち上がる。

健康な目覚め。

薬狩吉野の空を傾けて 東京 稲畑廣太郎

あぢさゐに駐車が出来て富士ありし 熱海 嶋田一步

深吉野の急峻を行く薬狩。

紫陽花に見る富士山。

六月の月ややいびつややうるみ 東京 今井千鶴子

風孕む雲は走りて梅雨晴間 熱海 嶋田摩耶子

六月の気配。

梅雨空の変幻。

子規虚子も偲ばるる須磨梅雨の月 京都 安原 葉

(以下略)